

文學論叢第百輯刊行にあたって

愛知大學文學論叢第一輯が發刊されたのは昭和二十四年十一月十五日、本學の開學三周年の創立記念日その日である。この年の四月、學制改革による新制大學への移行に際して文學部が増設され、以後、星霜四十有二年、研究に、教育に弛みなき歩みを続けて来た。創設時の文學部長秋葉隆先生は第一輯「發刊の辭」の冒頭に次のような文章を書かれている。

「大學の使命が學問の研究——眞理の探求に存することはいふまでもない。しかし、研究された業績、探求された成果は、これを何等かの形で發表するのだから、その本質的意義を發揮することはできないであらう。従つて、大學がしかるべき研究發表の機關を有つて、眞に學問的な雰圍氣を醸し出すことは、學の殿堂としての責任であり、教育の上からも好ましいことであらねばならぬ。」

ここには學術研究誌發刊の基本理念とその氣概が余す所なく述べられている。しかし以後、われわれが経験した四十数年は、前代未聞の年月であり、日本の經濟の急速な成長と、科學技術の目覚ましい發展に迫られた、まことに目まぐるしい春秋であつた。高度成長は豊かな社會を齎し、科學技術の進歩は生活の便宜を向上させる。しかし日本社會の繁榮は一方では國際的不協和音を醸し、機能優先の社會は福祉政策における弱者切り捨て等、負の面を露わにする。過剰生産と飽食・使い捨て、醫療技術の進歩と腦死問題、自動車社會と大氣汚染、特に地

球規模での汚染と環境破壊はかけがえない地球の未来にとつて死活の問題となっている。社会主義体制の崩壊が、バブル経済の崩壊が問題なのではない。人間という存在の一人一人の尊厳を軽視する組織的・体制的思考方法が問題なのだ。更には言えば、人間を取り巻くあらゆる生命の存在を軽視する思想が問題なのだ。そのような時代にあつて、愛知大学文学会を構成する諸分野の如き、哲学、思想、宗教、心理、社会、教育、人類、民俗、歴史、地球、文学、語学と言つた人間存在の条件と根本を問う人文科学諸分野の教育研究の緊急かつ重要性は増大こそすれ、決して軽視されてはならないものである。

従つて、愛知大学文学論叢も草創期のこの基本理念と気概を再確認して「われわれの學問的協力の成果の一端を江湖に贈り」（発刊の辞）続けることが何よりも肝要となるであろう。所で、右文章に「加ふるに、夜間別科の開講、名古屋分校の開設、短期大學部の準備など、相次いで発展する學内の膨張のために、教授諸君の勤務は文字通り晝夜兼行東奔西走の忙しさ」という興味深い指摘がある。学内の情況はあまり変わっていない、否、これ以上である。五学部を増設、中国・文学面研究科開設という悲願の成就に太平の夢を貪る暇もあらばこそ、ここに大学冬の時代、目前に控えて「逆風を順風に変える」ためのあらゆる努力が必要な時期にわれわれは当面している。即ち草創期の産みの苦しみをわれわれは何倍かして再び経験しつつあると言えよう。会員諸賢の御奮起と御鞭撻をお願いする所以である。

第一輯発刊の辞は次の如く締め括られている。

「われわれは尚ほこの文學論叢第一輯をもつて、わが文學部の生誕を祝し、遙かなる學問の道を行くわれらの、來し方を顧み、行くへを望む、一つの道標ともしたいと思ふ。」

「第一輯」を「第百輯」に、「文学部の生誕」を「文学会の未来」に、置き換えさせて頂いた上で、右文章を借用させて頂き、なおまた、百輯刊行を記念して、特別講演会の開催と記念図書・記念機器の設置が決まっていることを付言して拙文の筆を擱きたい。

平成四年五月吉日

愛知大学文学会委員長 尾崎昭美